

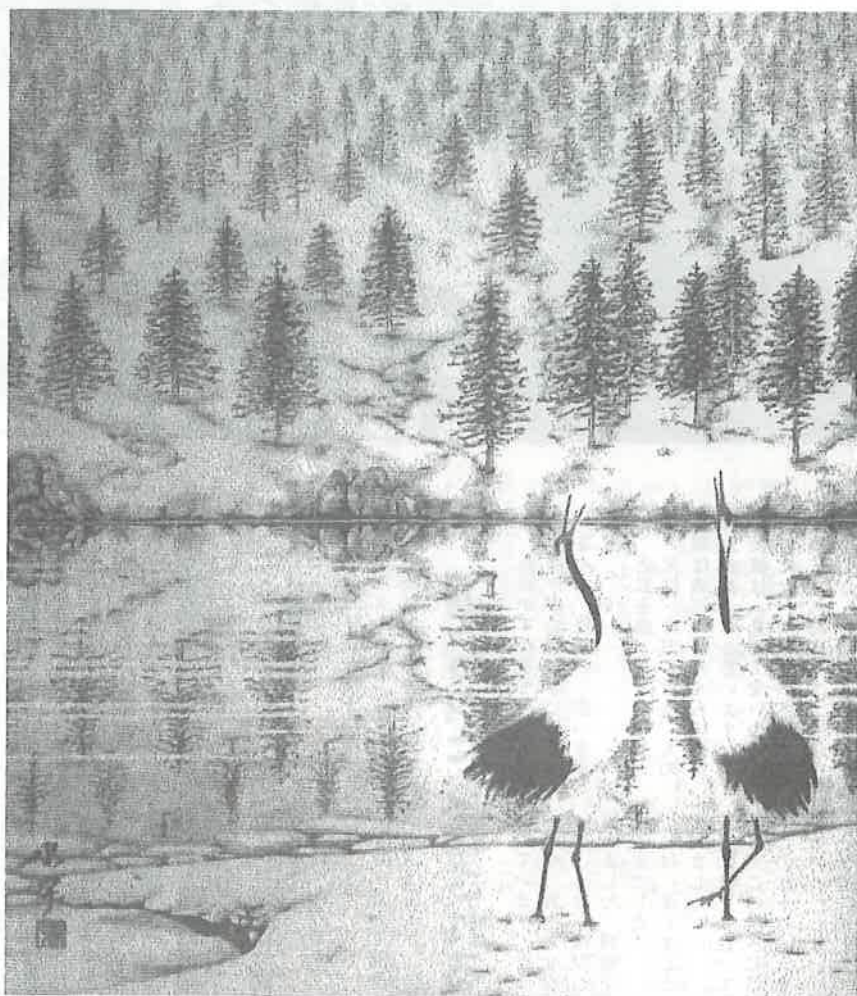
第155号
2008年1月26日

カナリヤの詩

CANTUS CANARIARUM

目次

- 1P 筆画「鶴唳水鏡」 宮前一明
2P～ 週刊新潮より「私はオウムの娘」に生まれたことを恨む 4女 記事
7P～ 私たちに必要なものは希望 宮城刑務所便り 平田悟
12P 教祖の子と加害者 窓口



2008年正月 宮前一明
画題「鶴唳水鏡」



私は 「オウム」の 生まれたこと

麻原と生まれて間もない四女(上)

長姉がさすが、
「破片が(卵に)まじって
るんで、危ないと思います
が……」
と私を庇ってくれました。
父は、片方の目は、人の
顔は識別できるくらいの視
力があつたと思いますが、
長姉は「見えてないのかも
しれない」と思つてそう言
ってくれたのです。
しかし、母も、他の姉も

「逆らったら殺される」

つて、両手が塞がっている
状態で歩くことは、想像以
上に難しいものでした。
私は何歩も行かないうち
に、皿を持ったまま、転ん
でしまったのです。
ガチャン。
つんのめつたように倒れ
たため、床にうちつけられ
た皿は粉々に割れ、オムレ
ツはグチャグチャになり、
皿の破片がそこにまじって
しまったのです。
「こ、ごめんなさい」
私は咄嗟に謝りました。
その時です。
前方の緑色の椅子に座つ
ていた父から、もの凄い「怒
りの波動」がやってきたの

です。それは、グルという
威厳のあるものではなく、
「なんてことをしたんだ」
「それは自分に対する不敬
だぞ!」という、強烈な、
そして激しい怒りの波動で
した。
おろおろとする私。その
時、母が一番上の姉が、
「この卵、どうしよう
か」
と、声を発しました。す
ると、父が、
「サチコ(仮名)に食べさせ
なさい」
と言つたのです。
「えっ?」
私は、思わず顔を上げて
父を見ました。

黙っています。すると父は、
「いや、食べさせなさい」
と、もう一度びしやりと
言いました。間髪を容れな
い否定でした。
私は、まじまじと父の顔
を見ました。
父は目をつむつて黙つた
まま。この時、私は、
「このヒトは、人を殺す人
間だ」
と咄嗟に感じたのです。

①



心の壁を壊った四女

私には忘れられない光景がある。父を「殺人者」として直感した瞬間。それはあれほど幼い日であったのに、なぜか鮮明に、そしてその時の空気さえ、私の記憶に刻みつけられている。私は、麻原彰晃(52)の四女として、1989年に生まれま

あ、地下鉄サリン事件が起ったのは、私が5歳の時であり、まだ小学校に上がる前のことでした。しかし、父が日本中を恐怖に陥れたその事件の、さらに前に、私は父を「人を殺す人間」だと、思った瞬間があったのです。父は、私にとって「父親」だったことはありません。

「麻原彰晃」四女 娘に を恨む

【独占手記】

父は、ずっと「ゲル」でした。つまり、私は、父を「指導者」として愛情のない状態でずっと見てきました。でも、生まれた最初からそうだったわけではありません。私は、ある時から恐怖によって父に「媚びる」ようになったのです。それは一体いつからなのか。私は、父に訣別するため、父に対して恐怖を抱くようになった記憶を思い返しました。その出来事に辿りつきました。

そう、父をそういう目で見るようになったのは、「あの時」だ。私はそこに辿りついたので。

それは、私が一人でやっ

と歩けるようになった3歳頃ではなかったかと思います。

上九一色村に、私たちの住居になる第六サティアンができ、私たち一家は、そこに移ったばかりでした。

私には父と母、そして姉が3人、弟が2人いますが、その時はまだ弟は生まれていなかった。第六サティアンは3階建ての巨大な倉庫のような建物で、この1階の一部分が私たちの住居になっており、引越を終えたばかりのこの時は、まだ私たち家族だけしかいませんでした。

その日、母はキッチンでオムレツを作っていました。野菜入りの卵焼きです。

家族はオムレツを作る母の後ろ姿を見ていました。私は、たぶん母にまわり

ついていたのでしよう。母のすぐ後ろにいました。

第六サティアンの私たちの住居は、台所とリビングがつながっているつくりになっていました。

台所には、長いテーブルがあり、そこに姉たちが座り、父はその後ろにある緑色の椅子に座っていました。床は板ではなく、それよりも少し柔らかいビニール状のものでできていました。「じゃあ、これ、持っていくてくれる？」

母は、たまたま後ろにいた私に、父のオムレツを持っていくよう、それを手渡しました。

私は、そのオムレツの皿を渡され、振り向いて、父のところに行こうとしました。

しかし、小さな子供にと

「私は、生まれてきたことを恨みます」。オウムの麻原彰晃の四女(18)が、苦しみ抜いた心の奥底を手記に綴って、本誌に寄せた。オウムは今も生き延び、危険性を増していると指摘する彼女は、その異様な世界を初めて内側から告発したのだ。何度も自殺を図った日々や父を殺人者であると直感した瞬間など、驚愕の事実が冷静な筆致で明らかにされる。

週刊新報

'08.1.31

26

4

週刊新潮

サティアン強制捜査の日



茨城県鹿島郡旭村、そして栃木県大田原市、さらには、茨城県龍ヶ崎市と、転々となりました。

私と弟は、通学することへの反対運動に晒され、いじめも受けました。

龍ヶ崎の小学校では、反対運動のデモに参加した子供もいて、クラスの掲示板にある当番の私の写真に画びょうが刺さっていたり、給食係の時に、私が給食をよそつても食べてもらえなかったり、また、私が父の自作自演の毒ガスによって皮膚が荒れていたため、「プールに入ったら、感染するんじゃないの?」と言われたり、日常的にいじめを受けました。

修学旅行の時は、トラップにも入れてもらえないし、私だけお菓子を分けてもらえなかったり、辛い目に遭いました。この時、姉に聞

い詰められた私はいじめを受けていることを初めて、しゃべってしまいました。

「それはいじめだよ」

と、姉は学校に抗議しました。しかし、何の対処もありません。

私は、耐えきれなくて声も出ないようになってしまい、夢のなかでいつも泣いているという悲惨な状態に陥ってしまいました。

なんとか卒業まではこぎ

初めて知ったオウムの大罪

龍ヶ崎で中学にも通いましたが、状況は何も変わわりませんでした。

いじめは続き、毎日、朝が来るのが怖くて、姉の部屋で「朝が来る」と泣いていた時期もありました。

母が刑期を終えて、和歌山の刑務所から帰ってきたのは、そんな時でした。

「サッチャン、学校には行つた方がいいと思うの」

と帰ってきた母は言いました。中1の10月のことです。しかし、学校に行くのが辛くて、私のリストカットが始まりました。血がたぐさん出るように、洗面器

つけましたが、何の対処もしてくれなかった校長が、「何事もなく卒業してくれてホッとしています」

と言ったのには驚きました。いじめがある、と訴えたのに、「何事もなかった」と言うのです。つまり、麻原の子供である自分がどんな目に遭おうとそれは関係ないが、ほかの生徒に何もなければそれでよし、という考えだったのです。

に水をためて、リストカットをしました。

そのせいか貧血で倒れたり、廊下をきちんと歩けなくなったり、いろいろな影響が出てきました。ある時、弟のヨシノリにそれが見つかり、姉に止められたこともありました。

中学2年の8月、とうとういじめを教育委員会に訴えることになりました。

しかし、教育委員会の課長も、中学の校長もこちらの言うことは、全く聞いてくれません。姉が、「サチコが自殺でもしたら、どうするんですか?」

3



富士山の下にあったオウムの「サティアン」

週刊新潮

小さな子供ですから、人殺し、という意味が正確にわかってるわけではありませぬ。そうではなく、このヒトは人が死ぬことについて、何も思わないんだ、ということを感じたのです。「このヒトに逆らったら、殺される」

私は、そう思いました。急に父のことが怖くなり、この時以来、父に媚びるようになったのだと思います。長姉はグチャグチャになったオムレツから、必死で破片を取り除いていました。母は、ただ向こうをむいて、オムレツを作り続けています。ほかの姉たちは何事もなかったかのように振る舞っている。映画のシーンのように、その場は、父と長姉と私の3人だけの光景になっていました。私は、そのオムレツを口

に入れました。じりじりと音がしました。かなり破片が残っていたのです。娘を庇わない母。そんなものを食べさせて、なんとも思わない父。何事もなかったように振る舞う長姉以外の2人の姉。その光景は、私の父の真実の姿に対する原体験となりました。

95年6月、母が逮捕された時のことも忘れられませんが、母は父が5月に逮捕された後、育児と仕事を両方やっていたので、奥が寝室で、手前の部屋を仕事場のようにしていました。この時、6歳の私の下に、2歳のヨシノリ(仮名)、1歳の弟テツノリ(仮名)の2人の弟がいました。母は逮捕にやってきた婦人警官に、「(テツノリが)寝つくまで待つて下さい」と交渉していました。

でも、結局、テツノリが寝つかないまま母は連行されることになりました。母はこの時、「(テツノリをよろしくね)」と、私とヨシノリに言いました。ヨシノリはまだ2歳。1

歳半の時にテツノリが生まれ、以来、母にかまってもられない弟でした。彼は1歳半の時から一人で広い8畳間で寝ることになり、一人で遊ぶようになりました。ヨシノリは、父が浮気している時に生まれたので、母はそのことが気に入らなかつたらしく、生まれた時から母の愛情を受けることができない子でした。

「ヨシちゃん」は2歳で死んだと言います。「みんながヨシちゃんのことを嫌いだ。でも、ヨシちゃんにはみんなのことが好きなんだよ」と言うようなナイーブで心優しい子です。しかし、母それでも子供ですから、母親のことは大好きでした。

いじめに晒された日々

翌年、父も母もいない中で、私は小学校に通い始めました。母親の実家に引き取られ、千葉県木更津市の小学校に通ったのです。「あなたオウムなの？」1年生の私は、上級生に囲まれて、そんなことを言

けれども連行の時、母は「テツノリをよろしくね」とだけしか言わず、しかも、そのまま私たち2人の方は振り返らず、去ってしまいました。

私は涙が溢れていましたので、母が振り返ったら泣いていることがバレてしまう、と思いましたが、母はそのまま行ってしまったのです。その時の哀しく、泣きそうなヨシノリの複雑な表情は、今も忘れられません。おそらく私も同じような表情だったと思います。私は母を信じていました。せめて、ヨシノリだけにでも、声をかけて欲しかったと思います。

母は、その後、裁判の期間も含めて丸7年、帰ってきませんでした。われしました。それがすごく怖かった。家族には、そのことが言えず、一人で膝を抱えて泣いていました。しかし、私自身、オウムとはどういうものなのか、一切知りませんし、誰も教えてくれません。事件のこ

となど、全くわかりませんでした。しかし、姉には、「私たちにとって正當な服は「クルタ」なのだから、それを着ていきなさい」とか、

「友だちを家に入れたら、カルマ(注1)業のこと)を受けるから、入れるな」とも言われました。

「カルマ落とし」といって、頭から水を掛けられたり、手が腫れるくらい叩かれたりしたこともあります。

姉のそういう暴力行為も、「(姉は)手が腫れてもサッチャんのカルマを受けてあげようとしたんですよ」と、信者の間では素晴らしいことをやっているように言われていました。

私が学校で接する友だちはオウムを信じていないため、食生活も違うし、そもそも宗教が違うのだから、彼らと触れ合うだけで「カルマを受ける」という考えだったのです。結局、家族と友だちとの狭間で苦しんだ私は、1年の1学期こそ学校に通ったものの、2学期の途中で登校できなくなっていました。それから私は家族と共に、

5

週刊新潮

と詰め寄ったら、校長は、「あなたのお父さんはたくさんの人を殺しましたね。でも、サチコさんの命は一つですよ」と言っただけです。つまり、私は死んでも構わない、と。結局、私はそんな校長のいる学校の門はくぐれないと思い、学校へ行くのをやめました。

姉の勤めで東京都下に移った私は、再び中学に通い始めました。ここは龍ヶ崎ほどひどくはなかったため、無事、卒業でき、公立高校にも合格して通うことができました。

実は、オウムの事件について、私は詳細を15歳になるまで知りませんでした。誰も教えてくれないし、そのことを誰もが避けていたからです。私は、勝手にこれは宗教戦争なんだ、と思っていました。

自分が信じているオウムという宗教を、ほかの人は信仰していないから、だから批判してくるんだ、と思ひ込んでいたのです。しかし、中学時代、社会科の先生が思わず、「オウムはヒトラーよりも

しだ」

という発言を行い、私はハッとして、これを調べるようになったのです。

私はそこで、父の弁護士長だった渡辺脩弁護士が書いた『麻原を死刑にして、それで済むのか?』という本を家の中で見つけ出し、これを読みました。

私はこの時、初めて父とオウムの犯罪を知りました。今まで自分が受けてきた仕

生きていく葛藤

姉が家庭の中で絶対的な権力者となり、逆らえば、家を出ていかなければならないような状態となり、母もそれに従っていました。姉は、私がどのクラブ活動をするかまで、すべてを指示して、逆らうことは許されませんでした。

たくさんの被害者が出ているにもかかわらず、被害者への弁済もしようとしません。その姉のやり方に違和感を覚え、私は、それが次第に我慢できなくなっていたのです。

姉に暴力を振るわれたことをきつかけに、私は、高

打ちの意味がこの時、初めて分ったのです。事件はやりしショックでしたが、これらまでのすべての疑問が氷解するのを感じました。高校に入学した私は誰にも麻原の子供であることに気づかれませんでした。クラブ活動に熱中し、ある程度、青春を謳歌できました。しかし、それと逆に、家庭でのいざこざが私を悩ませるようになったのです。

校1年の秋に最後のリストカットをして、家族と闘っていく」という決意を新たにしました。それをリストカットで出た血で決意文にしたためました。

私は、この時、初めて家を出ました。友だちの家に転がり込み、その後、児童相談所に行きました。ここで数カ月暮らしました。

この時、選択肢は3つありました。どこかの施設へ行くか、里親を探るか、親元へ帰るかの3つです。しかし、施設はオウム信者の子供がながしかの関係を持っていて、信者との

接点が生まれる恐れがある。里親も、事情が事情なのでとても無理でした。結局、私には親元へ帰るという選択肢しかありませんでした。しかし、帰っても、冷やかな扱いを受け、私は疎外感を抱き続けました。心の拠り所として、私は修行を続けましたが、それでも満たされませんでした。一昨年の1月下旬、母が、「サッチヤンがいるから、みんなが困るのよ」と何気なく言った言葉

にショックを受け、私は自分の太ももと胸を包丁で刺しました。出血はそれほどなかったものの、両方にはつきりと痕が残っています。以後、母に対して心を閉ざすようになりました。

私は2度目の家出をし、あちこちを転々とした。ジャーナリストの江川紹子さんを頼って、一時期、後見人になってもらったのも、この頃のことです。

私は、オウムも、私たちの家族もこのままではいけないと思っています。父と早く訣別し、被害者に心から謝罪し、賠償も行わなければならない。

しかし、現実にもオウムは形を変えて生き延びており、世間からどんなに攻撃を受けても、どこかのグループは生き残るようになっています。そして、そこが新たな活動を行うことになつていくのです。

その内の一つが、父を奪還するために、ヘリまで購入し、実際にあの東京拘置所の上を飛んだことがあることも私は知っています。

私は、いまだにそういう危険な団体があることに警鐘を鳴らすため、どうしてもこの手記を発表しなければなりません。

私は、自分が生まれてきたこと自体を恨んでいます。また、被害者のことを考えると、生きていることが申し訳ないという思いにも捕らわれます。しかし同時に、人を騙し続けているこの教団の酷さや怖さを明らかにしなければならぬ義務が自分にあることも分っています。

さまざまな葛藤を乗り越え、2度とあの悲劇を繰り返させないために、私は生きてその役割を果たしていこうと思っております。

1420.1.3

宮城刑務所だより「私達に必要なものは希望」 by 平田 悟 ①

12月の後半に、みのもんた と与野党の国会議員のトーク番組がTVで放送されていました。これは国民の重大関心事項をもとに与野党の国会議員が論戦するというものでした。重大関心事項はランキング方式とし、トップ10の下から順に与野党の議員の話と聞く内容でした。

国民の関心事は、年金や高齢化、政治とカネの問題やニュースを見返わせた偽装など、ほんとうにたくさんありました。それに対して国会議員が発言しているのを聞いていて、彼らが本当のことをあまり喋っていないと感じました。しかし、世の中の動きを知るには大変勉強になった番組でした。

この番組の最後に「あなたにとって大切なものは何ですか」とMCのみのもんたが質問した時、私は自分自身を含めて、日本人全員に希望が必要だと思いました。多くの議員は「命」と回答し、国民のインターネットによる集計では「ダントツで「家族」でした。

命は確かに大切だと思いますが、命の中に希望があるからだと思います。実際、自殺者の多くは希望を失ったがゆえに自ら命を断っています（全員ではないかもしれませんが）。その人達が年間3万人もいるのですから、日本人に希望が必要なのは、明らかです。中東では失業率が高く、若者の多くが希望を失っているというのをよく耳にします。その為かもしれませんが自爆テロの後を断ちません。このように命と希望は一体化していると思います。

地方では「限界集落」という地域が多数あります。ここでは最低年齢が70歳くらいというのがあります。このような所はあと何年もすれば、何もなくなっても人々が死に絶え、集落がゴースタウンとなって消えてしまいます。さらに――

②

「シャッター通り」と言われる地方の商店街があります。多くのお店が人口減からくる経営不振に陥り、お店を閉めてしまっています。地方には仕事がありませんので、人口流出が起り、それにより仕事がない状態です。このように地方には希望の炎が次々と下火となっているようです。

一方、大都市ではどうでしょう。都心ではキラビヤカな町がたくさんあり、再開発によって巨大ビルが次々と建っています。そのビルの中には食べ物や商品、サービス等が集まり、この世の春を謳歌しています。一方、地方とは正反対のような感じですが、そのような華やかな生活ができるのは「勝ち組」と言われている一部の人達だけであり、底辺の人達は日雇いの低賃金でやっとその日1日を生きるのが精一杯のようです。このようなフリーターの人達をネットカフェ難民ということも新聞で読みました。彼らのような「負け組」には目標などはない（全員がそうとは言いませんが）、その日暮しという人がザラのようです。彼らには何かの希望のようなものはないように思えてなりません。

希望がない人達は実に気の毒です。彼らはまるで死刑判決を受けた被告人のようです。私の友人達は死刑といわれるその日までただ生きるだけです。死ぬのうと思っても止められず、病気になっても治療を施され、死刑執行の日になるまで死ぬとすらできません。彼らと負け組の人達の違いは自由に自殺できるか否かにあるような気がします。

平成7年、私の取調べを行った鬼^{デカ}刑事の田中さんが、私に何度も強調していた言葉があります。それは、「どんなことがあっても絶対に希望を捨てるな！希望の火を絶やしたらダメだ！」です。幸い、これまで私は希望を失っ

③

たことありません。どんなことであっても夢や希望を諦めたことはありません。
だから、これまで無事に過せたのだと思います。

戦時中、ナチスに捕ってユダヤ人収容所で過ごした心理学者のフランク先生は希望の大切さを力説されています。先生はたまたま殺されずに、連合軍によって救出されましたが、多くの仲間達はナチスによって処刑されたり自ら命を断ったり、病気で亡くなったりしたそうです。まさに、絶望だけが支配する地獄です（地獄のようなと形容できない所です）。その地獄で病氣にもならず、死ななかったのは（処刑も多いいのですが、栄養不足や不衛生による病気で死ぬ人がおおく多かったそうです）、先生が希望を持ち続けたからだを回想されています。

現代は希望を持ち難い世の中です。しかし、それに逆行したとしても希望を持つことは大切だと思います。受刑中の私ですら希望を持ち続けているのですから、社会にいる人が希望を持ってないことはないと思います。

3

平成19年12月30日(記)

1720.1.3

宮城刑務所より、「新しい風邪の治療法!？」 by. 平田 悟

①

平成20年となり、刑期も残り3年となりました。出所後はオウム後継団体を解体する活動をしたいと思っておりますが、その頃にはそのような団体も消えていくかもしれません。そうないれば、幸いです(当職者にとっても)。

さて、今日は風邪の新しい治療法を実験してみたいので報告したいと思います。

平成19年12月中旬のことです。のどがイガイガして鼻の奥の方で少し変化した。「どうしたかな」と思っていると翌日風邪を引いているのがわかりました。この日から鼻水が涙水のように流れました。

刑務所では予算削減の影響から、なかなか薬を投与してくれなくなりました。以前はちょっとしたことで薬をもらっていましたが、手続きが面倒になったので、本当に辛い時以外は自然治癒力に任せることにしました。これは2〜3年くらい前から始めましたが、その頃から風邪を引いてもあまり酷くならなくなりました(歳のせいかな)週間くらい治るのに必要ですが)。

今回は自然治癒力に任せ、投薬は願ひ出ないつもりでしたがふとおもしろい実験を思い立ちました。それは、「風邪のウイルスとは闘わない」ということです。これまで自己実現や能力開発関係の本を多数読んでまいりましたが、数冊の中で(ただし著者は違いますが)次のようなことが書いてありました。

「エイズウイルスの魂は人の魂よりも精神性が高い」とか「インドのマザーテレサ関係施設でボランティアをしていた人が、あらゆる敵意(それがエイズウイルスのおうひものであっても)を捨てた結果、周りの人が赤痢等に罹っても、その人は平気だった」等。ウイルスであっても無役な殺生はすべきではないということなのです。

何にでもすぐにやってみなくなる性分の私なので、風邪のウイルスに対する

0-110

(2)

敵意を捨ててみようと思いました。体中の免疫システムに風邪のウイルスを攻撃しないようにずっと意識してみました。「私は攻撃はいから、さっさと出て行って欲しい」とウイルスにお願いする様な感じです。これをふとした時に思いついては、意識してみました。その間、およそ2日間。

しかし、これと言った程の反応はなく、何か間違っていないかと考えてみました。すると、「出て行って欲しい」という考えが排他的であることに気付く。「出て行かなくでもいい」と考えを改めました。そして、同時に「風邪のウイルスが攻撃してくるのは私が大自然のリズムとは違っているからだ。なぜなら、大自然もウイルスが攻撃するはずがない」等と考えました。さらに「病気は気付きのサイン」という言葉も頭をよぎりました。それで、大自然のリズムに一致するように意識してみました。具体的にどうすれば大自然のリズムと一致するかはわかりませんので特に何かを実行した訳ではありませんが、大自然と一体化したというのを感じようと思いました。また、そのことに気付かせてくれたウイルスに「ありがとう」と感謝するにしました。

これを2日程続けるとスーと軽くなったように感じました。風邪を引くと、およそ1週間くらいは体調が悪く、ものですが(部屋ではスキマ風がビュービュー入ってくるし、体調が悪くても早めにふとんに入って休むというのが、動作時間が減っているのでできません。だからなかなか治らないのです)、今回は2~3日早く治ったようです。しかも、全体的にあまり辛くありませんでした(鼻水がすごい以外は)。

今回はたまたま酷い風邪にたまたまなったのかもしれませんので、次に同じ様なことになれば、もう一度この手法をやってみようと思います。ご参考までに！

平成20年1月2日 (3)

「教祖の子と加害者」

週刊新潮1月31日号、教祖の四女の手記が5ページに渡ってあります。

もちろん、記者が構成しなおしたり、書けないことも隠していることもあるが、それでもそれなりの肉声がある。

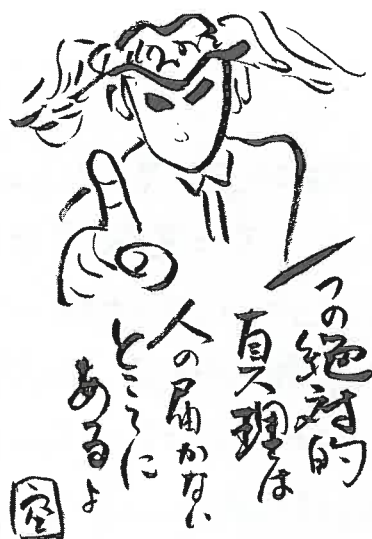
1—あらためて、あの1995年6月の、父そして母も逮捕された後、教祖の子供らにつき、児童福祉法上の一時保護が出来なかったことを悔やむ。

それは、もともと教祖の子のみは母と居住していたこと、既に20歳を過ぎた姉も居たこと（訂正—17～8歳、そんな姉ら兄弟姉妹で生活してたからか）、母が村岡らを養育係りとしたりしたことだからか、一時保護がしにくかったからです。

あのとき、もし12歳以下の子供についてだけでも、一時保護が出来ていたならば、四女もここまで異様な状態にならないですんだと思う。以前にも書いたが、あの頃保護された子どもは、私の知る限り、施設やオウムに行かなかった片親、祖父母らの努力で、皆、元気にやっている。

いまだ本人は不安定なのだろうと思う。彼女には幸せになる権利があるのだが。

2—教祖の子どもらに対する加害者は、
—1—父と母はもちろんだが、
—2—ここにも何度も書いているが、麻原彰晃を未だに信じ、そしてどういうわけかその妻子らをあがめたてがる現役の信者さんである。彼らがあがめ、お金を出すから、妻子らはそれぞれの自立が出来ない、しようとしな



—3—そして、カッコ書の「人権」派としか言いようがないが、オウム集団の本質のおぞましさに目をつぶり、本人らの将来のことも考えずに有害無益な弁護内容・代理活動をする弁護士並びに「知識人」とかである。

三女が住むマンションは信者名義であり（何故かローンが組めた）、龍ヶ崎の家の所有者は、Y2PCの社長となっている映画監督。

原理派信者や麻原家お付の信者は、自己正当化のために、また自ら一貫していたいという煩惱から、麻原家に従っているとしか言いようがない。

とてもおぞましいことなんだが。

発行 カナリヤの会

〒242-0021

神奈川県大和市中心 2-1-15 パークロード大和ビル2階

大和法律事務所 窓口 滝本太郎 気付

電話 046-263-0130 ファックス 046-263-0375 takitaro@yha.att.ne.jp

横浜銀行大和支店 普通 1343078 カナリヤの会 滝本太郎